

2 0 2 6 年 度

世 界 史

注 意

1. 監督者の合図があるまでは問題冊子と解答用紙を開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の決められた箇所に記入してください。
記号で答えられるものは記号で記入してください。
3. 試験開始後、解答用紙に氏名・受験番号を記入してください。
4. 試験問題はこの冊子の1～12ページに記載されています。
問題冊子の白紙部分は、メモとして使用して構いません。
5. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

I 12世紀から13世紀のヨーロッパに見られる、異文化との接触による学術の飛躍的發展に関する次の文章を読んで、文中の空欄

A

 ～

G

 にあてはまる最も適切な語句または数字を記入し、下線部(1)～(9)に対応する問1～9に答えなさい。なお、同名の人物がいる場合は区別のつく形で答え、「何世」とつく場合はかならずつけること。(例「ジョージ7世」)

アメリカの思想史家ハスキンスが12世紀ルネサンスという概念を提唱し、暗黒の中世という通念に衝撃を与えたのは、今から約1世紀前のことである。ラテン語世界が12世紀に経験した知的な革新は、彼が示したとおり、古代の「学術の再生」という点で、15世紀を中心とする本来のルネサンスをしのぐと言えるかもしれない。⁽¹⁾

12世紀ルネサンスにはローマ法やラテン文学の復興という側面もあるが、それらはラテン語文献の素養の復興とそれにもとづく官僚層の形成というフランク王国時代の変革の延長線上に捉えられる。⁽²⁾一方で12世紀の変化には、古代ギリシアの学術、ことに(自然科学を含む)哲学文献のラテン語への翻訳・伝播という、それまでにない特徴がある。一部はビザンツの古典学者らが伝承していたギリシア語写本からの翻訳だったが、皮肉な幸運と言えるのは、カトリック諸国の王と騎士によるビザンツ帝国領の略奪と破壊(1202～04年)⁽³⁾の寸前に、カトリック世界の知識人がそれらを救い出していた巡りあわせである。さらに、ギリシア語写本から翻訳が可能だった書物も含め、多くの古典がアラビア語訳からラテン語に重訳され、あわせて⁽⁴⁾ギリシア古典のアラビア語による注解書もラテン語となった。アリストテレスの主要著作のほとんどが、またプラトンやアルキメデス、ヒッポクラテスらの著作が、この1世紀の間にラテン語の写本として流通しはじめた。

12世紀ルネサンスはしばしば、折から東地中海方面で血刀をふるっていた騎士たちが、敵地の高度な文明から受けた衝撃に結びつけて説明される。しかし翻訳家たちの活動場所に注目するかぎり、12世紀ルネサンスの担い手はむしろ、拡張しつつあるカトリック世界のそのほかの周縁部で、アラビア語と先進知識を学ぶ修道士や知識人だった。当時のカトリック世界は、各地でイスラーム勢力を少しずつ押し返しては、そこに残ったアラビア語話者のキリスト教徒(モサラベ)やユダヤ人を取り込んでいた。⁽⁵⁾

例えばスペイン北東部では12世紀はじめ、カトリックの A 王国がサラゴサとその周辺をベルベル系イスラーム王朝から奪い、ユダヤ教徒やモサラベを新たな領民として抱えた。⁽⁶⁾ 彼らの中から学術書の翻訳者が現れ、さらに彼らの新奇な知識のうわさを聞きつけたヨーロッパ各地の学者がサラゴサを目ざし、アラビア語を学んだ。アラビア文化の移入に、さらに積極的だったのが、11世紀後半スペイン中央部の要衝 B を無血占領した C 王国だった。 B 大司教の指導の下に翻訳学派(翻訳学校)が活動し、そこに集まったモサラベやユダヤ人が翻訳のかたわら、各地から集まったカトリック世界の学者にアラビア語を教えた。例えばクレモナ(ロンバルディア)のゲラルドゥスは、エウクレイデスの『原論(幾何原本)』⁽⁷⁾をはじめ生涯で80を超えるアラビア語写本をラテン語に訳した。後世、A と C の両王国は統合を果たし、レコンキスタ⁽⁸⁾の仕上げとしてイスラーム教徒やユダヤ人の追放を熱心に進めるが、いずれもかつてはイスラーム文明受容の旗頭だったのである。

ビザンツ帝国とチュニジア系アグラブ朝の支配を経たシチリアを、11世紀後半支配下に置いたノルマン系王朝は、寛容な文化政策によりギリシア・アラビア・ラテンという3言語を用いる学術の交流を促した。聖職者や宮廷人によるアラビア語やギリシア語からラテン語への翻訳は12世紀に頂点に達し、ギリシア語原典がすでに失われていたプトレマイオスの『光学』をはじめ、アラビア語写本の真価を示す翻訳を多数残した。

この絶頂期をもたらしたシチリア王ロジェール(ルッジェーロ)2世の孫が、後に「玉座上の最初の近代人」とよばれる神聖ローマ皇帝 D である。1197年、幼くしてまず両シチリア王に即位した彼は、ギリシア人やイスラーム教徒、ユダヤ人に囲まれたパレルモの宮廷での暮らしを終生好んだ。後に彼は聖地奪回をせきたてる教皇から破門されながらも、E 朝のスルタン、アルカーミルとの書簡交換を通し、1229年、戦わずしてイェルサレムの支配権を確立した。学問談義を交えたアラビア語でのやりとりが育んだ、両者の信義のたまものとされる。パレルモの宮廷で活動した翻訳家、スコットランドのマイケル(ミケーレ)は、西方イスラーム哲学を大成した F によるアリストテレス注解をラテン語訳したが、一部はその後アラビア語写本が失われ、マイケルの訳文は今日も文献学的議論の起点とさ

れる。

神聖ローマ皇帝に即位して間もない1224年、 はナポリ大学を設立した。その初期(おそらく1240年代前半)の学生のひとりが、南イタリアの貴族の子で、後に『神学大全』を著し、スコラ学を大成した である。大学を出ると彼は托鉢修道会のドミニコ会に入り、家族の失望と引き換えにアリストテレス哲学の全体像をアルベルトゥス=マグヌスに学んだ。 は『形而上学』『自然学』『政治学』などアリストテレスの多くの著作を注解したが、そのほとんどが、12世紀ルネサンスなくしてはラテン語世界にそもそも存在しがたい「新知識」だった。彼がとりわけ多くを学んだのは、当時まだアラビア語からラテン語に訳されて間もない、12世紀コルドバ生まれのふたりの異教徒の著作だった——アリストテレス解釈については からの、信仰と理性の調停についてはユダヤ人モシェ=ベン=マイモンからの影響が、彼の著作の端々に明らかである。

が50歳になるかならないかで死んで3年ほど後の1277年、合理主義的アリストテレス解釈、とりわけラテン語訳された の著作に即した主張がパリ大学に蔓延。これに手を焼いたパリ大司教が、 の著作にも当てはまる広範囲の哲学的命題への批難を布告した。一説にアルベルトゥスはこの際、亡き愛弟子の神学的立場を弁護するため、80歳近い身でケルンからパリまで歩いたとされる。ほどなくして大司教の布告の効力が の主張には及ばないことが確認され、12世紀ルネサンスの大きな果実は辛くも生き延びた。ヨーロッパはこの時、学術的合理性との共存を選んだと言えるのかもしれない。

問1 (a) 14世紀に金融業で成功し、フィレンツェにいち早く開花したルネサンスの学芸を保護し、15世紀には一時都市共和国の支配権さえ握った一族の名を答えなさい。

(b) 15世紀を中心とするルネサンスの知識伝達に12世紀ルネサンスとの決定的な相違をもたらした、鑄造活字を用いる機械的な印刷技術を、1450年頃実用化した人物の名を答えなさい。

問2 王国の宗教政策について助言し、教義や典礼の整備を進め、アーヘン・トゥールの宮廷学校を運営してこの変革に尽力した、イギリス出身の神学者の名を答えなさい。

問3 (a) 自国の商人の利益のため、この遠征が聖地に向かわずビザンツ帝国を略奪するよう仕向けたとされる、都市共和国の名を答えなさい。

(b) この遠征を行った勢力がビザンツ帝国の都を占領して建てた国の名を答えなさい。

問4 アッバース朝の都バグダードに設けられ、ギリシア語を中心に科学や哲学の文献をアラビア語に訳した翻訳・研究機関の名を答えなさい。

問5 (a) イスラーム法は、キリスト教徒とユダヤ教徒を、改宗を迫るべき多神教徒と区別し、一定の条件で庇護すべき者(ズィンミー)と見なす。『ヘブライ語聖書』(いわゆる旧約)と『新約聖書』が『クルアーン(コーラン)』と同一の本質をもつとする理解に即して、おもにキリスト教徒とユダヤ教徒からなる異教徒の類型を何と呼ぶか答えなさい。

(b) 少数の例外を除き、実際にイスラーム諸王朝はキリスト教徒やユダヤ教徒に改宗を強いなかったが、信仰を許す代わりにある種の税を課した。この税の名をアラビア語に由来するカタカナ表記で答えなさい。

問6 この王朝の名を答えなさい。

問7 この書物の一部をマテオ=リッチと共に漢訳した明の文人官僚の名を答えなさい。

問 8 (a) イベリア半島最後のイスラーム王国が降伏・滅亡し、レコンキスタが完成した年を答えなさい。

(b) この際、降伏・滅亡したイベリア半島最後のイスラーム王朝の名を答えなさい。

問 9 パリ大学と並ぶある代表的中世大学は、学生の組合に起源を持ち、設立当初教会に対して教授免許授与権を認めず、ローマ法研究で名高かった。現存するヨーロッパ最古の大学とされる、この大学の名を答えなさい。

Ⅱ 東南アジアの初期国家の成立に関する次の文章を読んで、文中の空欄 ～ にあてはまる最も適切な語句を記入しなさい。また、下線部(1)～(3)に対応する問1～3に答えなさい。なお、人名で「何世」とつく場合はかならずつけること。(例「ジョージ7世」)

紀元前2千年紀には、現在のベトナム北部に、フングエン文化と呼ばれる新石器文化が出現し、紀元前1500年頃には金属器をもつようになった。この基盤の上に、紀元前5世紀頃に雲南から を受け入れ、東南アジアを代表する 文化が成立した。 文化の名称はベトナム北部の 遺跡から青銅器・鉄器が発見されたことに由来するが、 文化を代表する青銅製の祭器である は、中国南部からベトナム北部、さらにメコン川流域、マレー半島、ジャワ島などに広がっている。

この 文化と同じ頃、現在のベトナム中部には、サーフィン文化と呼ばれる別の金属器文化が栄えていた。サーフィン文化は、ユニークな装飾品で知られ、南シナ海をまたいでフィリピンなどにも広がる、オーストロネシア系の海洋民を担い手とする文化だった。

は、河川、港湾、内陸道路などの交通の要衝にある有力者の墓から、多く出土している。このことは、2つの意味をもっている。1つは、 が、富と権力の象徴であったと考えられ、それを使用した社会には、首長制が成立していたと思われるということである。もう1つは、東南アジアは、すでにこの時期から交易のネットワークで結ばれていたということである。これを土台として、東南アジアの初期国家が展開していく。

東南アジアの初期国家の形成に大きな影響を与えた外部世界の動向としては、まず、東南アジアに隣接する中国とインドで、強力な王朝が形成されたことを指摘しておかなければならない。中国では、紀元前221年の秦の始皇帝による統一に続き、紀元前202年から紀元後220年にわたる漢帝国(前漢、後漢)が出現した。特に漢は、紀元前111年に第7代皇帝であった 帝が南方へ出兵し、今日の広州からベトナム北部を支配していた南越を滅ぼし、ベトナム北部・中部に交趾、九真、 の三郡を置いた。 文化の担い手で、初期国家の形成途上

にあった人々は、根強い抵抗を見せるが、やがて漢の支配に組み込まれていく。ベトナム北部の紅河デルタにおかれた交趾郡は、東南アジアのデルタとしては例外的に早期から稲作地として開発され、中国と南方を結ぶ交易路の要衝としても栄えた。

南方の九真郡と 郡も、南シナ海交易の要衝だったと考えられており、漢帝国の出現によって活性化した南海交易の出先拠点として機能することになった。中国の資料には、159年と161年には「天竺国」からの使節が、そして166年には「大秦王安敦」の使者が、いずれも海路で 郡に至り、漢に朝貢してきたとある。後漢が衰退する2世紀末には、 郡が林邑として、中国の支配から自立する。

後漢の滅亡以降、中国では分裂の時代を迎える。これに終止符を打ったのは楊堅によって建てられた 朝による中国統一とそれに続く王朝の成立だった。これらの王朝の成立は、東南アジアの交易の発展を促した。

いっぽう、インドでは、 朝(320年頃～550年頃)の成立が大きな意味をもった。都がパータリプトラにあった 朝は、インド古典文化を完成させた王朝として知られ、3世紀に宗教として成立したといわれる 教を国家の宗教とし、バラモンという言葉である 語を公用語とし、 古典文化を各地に広めた。また、大乘仏教が、 教の影響を受けて、秘密の教義と儀礼を師から弟子へと伝える密教として展開されるようになった。

東南アジアの「インド化」といわれる現象は、インド的な王権概念を基礎とした 教・大乘仏教の信仰、『』や『』という 叙事詩やプラーナ神話の変容、古典インド法典の遵守、 語による表現などからなる文化複合を受け入れることだったが、こうした「インド化」は、ほぼ同時期に 朝のもとで進展していた文化現象だった。つまり、インド亜大陸内部の「インド化」と、東南アジアの「インド化」は、同時並行的に進んだのである。なお、『』は、⁽²⁾コーサラ国を舞台に王子の冒険をうたった叙事詩であり、詩人ヴァールミーキ作と伝えられている。またインドの大叙事詩である『』には、私心を捨てて本務に励むことが解脱に至る道であると説かれている章が含まれている。 語で書かれ、 教の聖典ともされる『』や

『 J 』は、東南アジアをはじめ各地の文化に多大な影響を与えた。

この東南アジアの海で、季節風を本格的に活用する航海が定着するのは、4世紀のことと考えられている。5世紀初頭に海路インドから帰国した中国の僧 K の『仏国記』⁽³⁾は、東南アジアの海において季節風を利用した航海が行われたことを記録した、最初の資料である。こうした航海術の発展によって、外部世界が東南アジアに与える影響力も大きくなっていった。

(古田元夫『東南アジア史10講』より引用。文章は一部改変)

問1 「大秦王安敦」の「大秦」とはローマ帝国、「安敦」とはある皇帝の名前を示していると考えられている。この皇帝について記述したものとして正しいものを、以下の選択肢(あ)～(お)から一つ選び、記号で解答欄に記入しなさい。

- (あ) ギリシア古典に通じた皇帝であり、古来の伝統宗教を尊重して宗教寛容令を出し、キリスト教優遇を廃止した。
- (い) 中央集権的な官僚制を実施して徴税を強化した皇帝で、ドミナトゥスを開始、皇帝の権威を高めるため皇帝崇拜を強制した。
- (う) 「哲人皇帝」とも呼ばれるストア派哲学に通じた皇帝であり、『自省録』を著した。
- (え) ハギア=ソフィア聖堂をはじめとする壮大な造営事業や、ローマ法の集大成、養蚕技術の導入を進めた。
- (お) 初の属州出身の皇帝であり、ダキア(現在のルーマニア)を属州とし、一時はメソポタミアの征服に成功した。

問2 コーサラ国は、紀元前6世紀頃にガンジス川中流域に成立した国である。

『 I 』の舞台とされ、おおいに繁栄したものの、紀元前5世紀にある国に併合された。鉄や森林などの資源に恵まれ、戦車や投石器などを用いて台頭し、ガンジス川中流域を統合したこの国の名称を答えなさい。

- 問3 (a) 『仏国記』の中で「超日王」との記述があるが、この「超日王」は北インドを統一し、 朝の最盛期を現出した国王と考えられている。この国王の名前を答えなさい。
- (b) (a)の宮廷詩人として5世紀頃に活躍し、 文学を代表する作品で『』に登場する娘と王の恋愛を主題とする戯曲を残した詩人・戯曲作家の名前を答えなさい。

Ⅲ 以下の文章は、日本の小説家である石川達三(1905～85年)の『蒼氓』の一節である。これを読み、続く文中の空欄 [A] ～ [J] にあてはまる最も適切な語句または数字を記入しなさい。

「 [A] さ行くからには俺あ、死んだ気ンなって働らぐつもりだ。……
なあ麦原さん」

「ンだなし」と彼は皺の寄った黒い顔をあげて答えた。

「どうせ日本に居だとして、何ともなんねで、飢え死ぬもんなら。……な
しゃ！」

「ンだんだ」と相手は応じた。「誰もな、楽に食べられる者だら、移民にあな
んね。なあ」

彼等はいかした諦めを持っていた。諦めと混った希望をもっていた。彼等の
みならず殆んど全部の移民が希望をもっていた。それは貧乏と苦闘に疲れた後
の少しく捨鉢な色を帯びた、それだけに向こう見ずな希望であった。

(石川達三『蒼氓』筑摩現代文学大系より引用)

[A] の地にはもともと、モンゴロイド系の人々がベーリング海峡を渡って
移住し、独自の農耕文明を発展させていた。しかし1500年、航海者 [B] がこ
の地に漂着すると、6年前に締結された [C] 条約にもとづき、 [A] は
[D] 領となった。 [A] の公用語が [D] 語であるのはこのことによ
る。

1822年、 [E] と呼ばれる植民地生まれの白人たちが独立を求めたことを背
景に、 [A] は帝国として独立した。1888年には奴隷制廃止によって経済的混
乱が生じ、共和政へと移行したが、不足した労働力は移民によってまかなわれるこ
ととなった。

そのころ日本では、西郷隆盛を中心に不平士族が起こした [F] 戦争により
経済が混乱し、移民政策が行われるようになっていた。1885年、サトウキビ栽培と
製糖業で盛んな [G] 王国への移民が本格化したのを皮切りに、北米にも移民
が始まる。その後北米での移民反対論が強まると今度は南米が目指され、1908年、

□ A □ にも日本人が渡るようになった。上の抜粋はそうすを描いたものである。1918年の、富山県の主婦たちの蜂起を機に広まった □ H □ , 1923年9月1日に発生し約10万人の死者を出した地震である □ I □ , □ J □ 年10月24日の株価暴落をきっかけとする世界恐慌による経済の混乱で農村が打撃を受けると、政府はさらに移民を奨励した。

移民船による集団移民は1970年代に終わったが、以降は □ A □ の経済の不況から今度は日系移民たちが日本に移住するようになっている。

Ⅳ 世界の暦に関して述べた次の文章を読んで、文中の空欄 ～ にあてはまる最も適切な語句または数字を記入しなさい。

暦(こよみ)とは、時の流れを年、月、日などによって区切り、数える体系をいう。暦には、月の運行を基準とする 暦と、太陽の運行を基準とする太陽暦がある。

今日の世界で広く用いられている暦の一つは16世紀末につくりだされた太陽暦のひとつ、 暦である。キリスト教世界では長らく古代ローマのカエサルが採用した 暦が用いられてきたが、暦と自然の回帰とのずれが生じ、復活祭の日取りをめぐる不都合が生じた。このため1582年にローマ教皇 13世のもと、400年に3度間を省略する暦がつくりだされた。

暦から 暦への移行はヨーロッパのなかでも地域差があり、カトリック世界がもっともはやく、18世紀のプロテスタント地域、第一次世界大戦直後の東欧・バルカン地域へと続いた。なお、南北アメリカでは先住アメリカ人の独自の暦法があったが、ヨーロッパからの移住者の増加とともに 暦が普及していった。

一方、イスラーム世界では 暦を採用し、預言者ムハンマドがメッカからメディナへ移住()した年を紀元元年とした。このためイスラーム暦を 暦ともいう。イスラーム暦は西アジアやアフリカ大陸のイスラーム諸国、パキスタンやバングラデシュ、マレーシア、インドネシアなどでも太陽暦と併用されている。

東アジアでは中国や日本、朝鮮などで 太陽暦が広く使用されていた。
 太陽暦とは、 暦を基本に、月の満ち欠けと太陽の運行を組み合わせ、閏月をおく暦である。このうち太陽暦採用がもっとも早かったのは日本であった。明治維新後の1872年に太陽暦を採用し、明治5年12月3日を明治6年1月1日とした。続けて、朝鮮では甲午農民戦争の始まった 年におこなわれた改革により太陽暦が採用された。最後の中国が太陽暦を採用したのは辛亥革命後のことである。